
友達。

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達。

【Nコード】

N0560F

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

美海は莉子と一緒にデパートに来ていた。ある時美海は迷子になってしまった。その時出会ったカッコイイ人。その人の正体は・・・？

いち。

「これからもずっと友達だよ！」

「うん！あたりまえ」

この日に交わした言葉が本当になるとおもっていた。

「美海^{みみ}！あっち見よ？」

「うん 行く行く」

私達は並んでアクセサリーの売っている店へ走った。

私達は今、女子高生に人気のデパート【ミライケ】に来ていた。

1年に3、4回はココに2人で来ているのだ。

「わあ〜 可愛い〜」

一緒に来ている友達の莉子^{りし}がリボンのチャームが付いたカチューシヤに見とれている。

私もカチューシヤを見してみる。

「ホントだ！むちゃ可愛い」

「買おつかな〜。・・・でも高校生でカチューシャはないかあ」

「うん・・・。ちょっと抵抗あるかも」

莉子は少ししょんぼりしながらほかのアクセサリーを見て回った。

私も少しブルー。

「あ！」

莉子はなにか見つけたのか私に近づいてきた。

「美海！！じゃあさ、ピアスはど？」

莉子が私の目の前にハートのピアスを差し出し、にっこり笑う。

「うん！いいかも」

私がそう言つと莉子の表情が明るくなった。

すると、莉子がピアスが置いてあったところにむかった。

・・・え？買うんじゃないの？

莉子がまた戻ってきた。

「はい」

そして私に莉子と同じのピアスを手渡した。

「え？」

「おそろにしよーよ 親友っていう証拠」

おそろ……。親友っていう証拠……。

私は嬉しさが込み上げてきた。

「うん そしよ」

莉子は私の返事を聞くとにこつと笑った。

ホント……。莉子って可愛いなあ。うらやましい……。

そう思いながらレジに向い、お金を払った。

私達はさつき買ったピアスをつけた。

「美海^{みみ}かわいいー 似合ってる」

「そう？ありがと つか、莉子^{りこ}の方が似合ってるよ！」

「ホントに?! ありがとお」

莉子はピアスをしてる方の耳に髪をかけた。

ピアスが陽に反射してキラッと光る。

ホントに……。ホントに似合ってる。

私なんて……。

ポーっと歩いていて気付くと莉子の姿がなかった。

「え?! 莉子?!」

もしかして私……迷子?!

うそ?! どうしよつっ。

私はパニックって頭は混乱状態。

その時。

「あの……。すみません」

誰かに声をかけられた。

私が振り返るとそこにはすっごくカッコイイ人が立っていた。

「え? ……何でしょうか……?」

「……」

男の人は黙ったまま。

え? どうしちゃったの……?

「キミ……」

「え？」

「キミすっごく可愛いじゃん！」

「え？えええええ？！」

“すっごく可愛いじゃん”

そんなの・・・初めていわれた・・・。

私は思わず顔を赤面させてしまう。

「あのさ、芸能界に入ってみる気ない？」

「芸能界・・・ですか」

「うん。ど？」

芸能界のことなんて一度も考えたことなんてなかったから分かんないよ。

「えっと・・・まだよく分からないです」

「そっか・・・。じゃあ電話して？はい」

男の人は内ポケットから名刺みたいなのとペンを取り出し、名刺の裏に何かを書きだした。

そして書き終わったのか、私にその名刺を差し出す。

私はその名刺を受け取った。

裏を見ると、携帯の電話番号が書かれていた。

これって・・・男の人の番号？！

「じゃ。電話待ってるよ」

男の人はウインクをしてどこかへ行ってしまった。

・・・それよりも・・・あの人がカッコよかったなあ。

名刺をもう一度見ると、表に名前が書いてあるのを見つけた。

あの人の名前は【甲乃輝】（こうのてるみ）。

なんか・・・ドキドキする・・・。

くピロリロリン

携帯にメールだ。

一瞬ドキッとしてしまった。

カバンから携帯を取り出し見てみると、莉子（りこ）からのメールだった。

『美海（みみ）どこ？！¥（。□¥）（／□）（／』

この内容を読んで気づいた。

“私は迷子になっているんだ”・・・ということ。

私は返事をうった。

『なんかトイレの前！』

そーしん！つと。

莉子りこに送信してから約10分後。

「美海みみ！！！」

遠くから莉子りこの声が聞こえた。

「莉子りこ！！」

私は必死で手を振った。

莉子りこがどんどん近づいてきた。

「美海みみ。心配したよお」

莉子りこは息切れしていた。

私のことを必死で探してくれていたのだろう。

「ごめんね。ぼーっとしてたらいつのまにかはぐれちゃって」

「まあ見つかってよかった」

「……莉子。あのね」

私はさつき甲乃さんに出会ったことを話した。

「そうなんだ。シー……、いーんじゃない？」

「え？」

「芸能界。入っちゃいなよ」

スラッと言う莉子。

「ええ?! つか、そんな簡単なことじゃないんだよ?」

「分かってるよ。でも美海ならいけるって」

いつものようにニコッと笑う莉子。

「まあ考えてみる」

私達はそのまま【ミライケ】を出た。

そしてどこも寄らずにまっすぐ家に帰った。

にい。

私は家に帰り、リビングにむかった。

部屋には誰もいない。

それよか、家内にも誰もいない。

どうせどこかへ出かけているのだろう。

こんなのいつものことだ。

私はカバンをソファアの上に置き、キッチンへ向かう。

そして冷蔵庫を開け、牛乳を取り出す。

〜ピロリロリン

その時、メールが来た。

私は取り出した牛乳を置き、ソファアに小走りで向かう。

そしてカバンから携帯を取り出しメールをチェックする。

メールは莉子りこからだった。

『今日は楽しかったネン また行こー！』

『私も！絶対行こね（> <）ノ』

メールを返信した。

はあ……。

私は牛乳のことを忘れ、ソファーに座りこんだ。

その時にカバンの中から甲乃^{ユウ}さんにもらった名刺が出てきた。

……そうだ。私……誘われちゃったんだっけ。

どうしよう……。芸能界……。

お母さんたちに相談したほうがいいのかな。

もしかしたら！

芸能界に入れば甲乃^{ユウ}さんに逢えるかも！！

よし！！そうと決まれば電話だ。

私は携帯を手に取り、名刺の裏の番号を見ながら番号をつっていく。

プルプルプルッ。

プルプ……ッ。

「はい？」

で……。出たっ?!

「もっもしもし!」

私はなぜか慌てる。

「……誰?」

「あっあの、私……今日の昼ごろ会ったものですが……」

「あ!もしかして可愛子ちゃん?!」

か……可愛子ちゃん?!

なんか……うれしい。。

「は……はい……?」

「やっぱりー 電話してくれたんだあ」

「はい。芸能界のこと……考えがまとまったので」

私がそう言つと甲乃^{Suru}さんは黙りこんでしまった。

「あの……?甲乃^{Suru}さん?」

「ごめん……」

「え?」

「芸能界の話は嘘だったんだ」

「……ええええ?!」

「な……何ソレ?!」

「私必死で考えたのに!」

「ど……どうゆう事ですか?!」

「ホントはキミともっと話したりしたかったんだ……。」「ごめん!」

「そう……。だったんだ。」

「……。それって、甲乃さん、私のこと……?」

「……。別にいいですよ。私ももっと甲乃さんと話したいし」

「ありがとう!あさ、メールしない?アドレス教えてよ」

「はい」

「私はアドを教えた。」

「これで甲乃さんともっと関われると思うと嬉しかった。」

「じゃあまた後でメールするよ」

「はい。待ってます」

「プツッ。プープープー……。」

電話が切れた。

〜ピロピロリン

電話が切れた瞬間に莉子りこからメールが来た。

『ねーねー 恋のほうはど?』

恋・・・か・・・。

『私・・・甲乃こうのさんのこと好きみたい』

メールを送信した。

〜ピロピロピロ

すぐに電話が来た。

「もしもし」

「あ！美海みみ？甲乃こうのさんって誰?！」

あ・・・その話が。

「あの芸能界に入らない?って言った人だよ」

「うそ?!あの人好きになったの?!で。進展あり?」

「さっき電話してて、アド教えたの」

「まぢでー?! す「うー!」」

そ・・・そう?

まあ甲乃ユウさんに出会えた時点で奇跡だしね。

「でさ! 芸能界入りはどうなったの?」

電話の向むかいの莉子りしはなんだかウキウキしているようだった。

「ん・・・。あれはうそだったの」

「え? そうなの? 残念だったね」

「ううん。別にいいの。甲乃ユウさんとまた話せたし」

そつだよ。甲乃ユウさんが嘘言ってくれたおかげでまた話せたんだもん。

こんな嬉しいことはないよ。

「そつか。あ! ごはんだ! じゃね!」

「うん」

プツッ。プープープー・・・。

電話が切れた。

はあ・・・。今日はいろいろあつて疲れた・・・。

ん？何か忘れてるような……。

……あ！！牛乳！！！！

私は急いでキッチンに向う。

牛乳……大丈夫だよね？

私はコップを引き出しから取り出し、おそるおそる牛乳をコップに
注ぎ入れる。

コップを口に近づけ、一口飲んでみる。

あ……。おいしい。

……無事でよかった。

さん。

あれから甲乃^{ユリ}さんからメールが来た。

『名前教えて?』

って。

私はすぐに返信した。

『美海^{みみ}だよ(^ U ^)』

『じゃあ美海^{みみ}って呼んでもいい?』

え?えええええ?!

私は内容を読んで顔を赤面させる。

『う・・・うん!』

私は指が震えながらも内容をうち、メールを送信した。

『俺のことも輝^{てる}でいいから』

なんか・・・恋人同士みたい・・・

『分かったヨーン』

さっきまではすぐに返ってきた返事がなぜか何分経っても返ってこ

なかった。

・・・お風呂でも入ってるのかな？

そう思いながらも私は勉強していた。

そして45分後、やっとメールが返ってきた。

『今度会お？』

うそっ?!これって・・・デートのお誘い？

どうしよう・・・でも私も逢いたい!!

『よろこんで』

『いつ空いてる?』

『明日・・・ぐらいかな』

『じゃあ明日11:00頃【ララ喫茶】で』

『OK(・U<(・b』

それからメールはこなかった。

明日・・・どんな服着ていこかな

私はクローゼットを開き、いろんな洋服を着て一人でファッションショーをしていた。

そして次の日。

私は一番お気に入りの服を着て喫茶店へ向かった。

40分後、ようやく喫茶店に着いた。

くカランコロン

ドアを開くと、ドアのぶにかかった鈴が鳴る。

それを聞いた店員が待ってましたとばかりに振りむく。

「いらっしやいませー」

「あ……人と待ち合わせをしまして……」

「美海！」

向こうの方から私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

キョロキョロ見渡すと、一番端の窓側に輝てるが座っていて軽く手を振っている。

私は店員を無視して輝てるの座っている席へ向かった。

「ひゃっぶっ」

「おう」

私は輝てるの向かい側に座った。

「なんか・・・緊張しちゃう」

「そうなんだ。実はおれも」

つい黙りこみになってしまふ。

何話そう・・・。

そう思っていたとき。

「あれ？美海みみ？？」

聞いたことのある声が耳に入った。

見ると、莉子りしこが立っていた。

「り・・・莉子りしこ?!なんで・・・」

「私ココでバイトしてるんだ。・・・あれ？この人は？」

「この人は甲乃こうのさん」

私が莉子りしこに輝てるのことを紹介すると、輝てるは軽く礼をする。

「あゝ!・・・どうも。莉子りしこです。美海みみの友達です」

莉子も軽く礼をする。

「莉子怒られないの?」

「うん。さっき終わったとこなんだ。それより甲乃さんってカッ
コいいですね」

莉子が無理やり輝の隣に座る。

「あ……ありがとう」

輝は急なことで少しびっくりしている。

私もびっくり。

つか、なに割り込みしてんの?!

「ねえ、私も一緒に遊んでもいい?」

「え……どうする?」

輝が私に聞いて来る。

どうしようって……。

ホントは二人でいたいけど莉子にイヤな思いさせたくないし……。

「いいよ! 3人でどっか行く?」

「ありがとう」

いつものように莉子がニッコリ笑う。

「じゃあどこ行く？」

輝が話題を出す。

「私カラオケ行って甲乃さんの歌声聞きた〜い」

莉子が甘えた声で提案を出す。

なんか莉子いつもと違うんですけど……。

「いいけど……美海は？」

「あ。いいよ」

私は苦笑い。

「あれえ？甲乃さん美海って呼んでんの？」

「あ。うん」

「じゃあ私のことも莉子って呼んでよ」

「え……あ……うん」

輝はチラッと私を見て返事をした。

「やった〜 甲乃さんアドレス教えてくださいよ……」

「あゝ今携帯持ってきてないんだ」

「うっそ〜。シヨックウ」

莉子^{りこ}・・・もしかして輝^{てる}のこと・・・。

よん。

あれから莉子は輝にくっついてばかり。

「ねーねー！あれとって！」

莉子が指さしてるのはUFOキャッチャーに積まれてる中の猫のぬいぐるみ。

「いいよ」

輝は100円を入れて機械を動かす。

そして猫のぬいぐるみを1回で取った。

機械は猫のぬいぐるみを離し、出口へ落とす。

出口にコロんと出てきた猫のぬいぐるみ。

そのぬいぐるみを手取る莉子。

「うわあ ありがとう」

私はそんな2人を見ていられず、ほかのゲームを見て回った。

私の目に飛び込んできたのはきれいなピンク色の時計。

・・・可愛い

私はその時計に夢中になった。

取りたいけどむずかしそう……。

「何見てんの？」

ひょいっと出てきた輝^{てる}の顔。

私は一瞬ドキッとしてしまった。

「あ……あの時計可愛いなあって思っただけ！」

私は時計を指さす。

「……じゃあ俺が取ってやるよ」

「いや！いいよ。つか莉子^{りしこ}は？」

「アイツならなんかうざいからまいてきた」

輝^{てる}は100円を入れ、機械を動かす。

また1発で取った。

出口にコロンツと出てきた時計。

「ありがとう」

「喜んでくれてよかった」

ニコツと笑う輝。

その笑顔がとつても可愛くて、とても愛しくなった。

輝は満足そうな顔で私の顔を見る。

「なんかほしいのある？」

「ううん！これで十分！」

あんまりお金・・・使わしたくないしね。

「ねー甲乃さあん」

また莉子が甘えた声を出して輝にくつつく。

なんかむかつくんですけど・・・。

「何？」

「早くカラオケいこー？」

輝が“どうする？”って顔をして私の顔を見る。

「よし！カラオケ行こー！」

私は輝より先に言う。

「さっすが美海！行こ？」

莉子は輝の腕を引つ張った。

「ちよっ・・・」

莉子は輝の言葉を聞かず、ゲームセンターから出て行った。

私も必死でついていく。

置いて行かれたら莉子、輝に何するか分かんないし！

着いたのは【ミレミカラオケ】。

ここは私と莉子がよく来るカラオケだ。

「ココ、よく美海と来るんだよ。ねー？」

莉子が急に私に話をふってきた。

「う、うん！」

私は少し動揺しながら答える。

「へへ。いい店だね」

輝は莉子じゃなくて私に向かって笑顔を見せた。

なんかちよっぴり嬉しい・・・

私達は店内に入った。

輝^{てる}がレジで予約を取る。

私と莉子^{りし}はそれが終わるまで近くの椅子に座っていることにした。

「イイよね〜甲乃さん」

莉子^{りし}がボソツと言った。

「・・・え？」

「美海^{みみ}が好きになったの、分かる気がするな〜」

それ・・・どうゆう意味？

頭混乱しすぎて分かんないよ〜！

私は頭を抱える。

「終わったよ」

予約を取り終わったのか輝^{てる}が私達に近づいてきた。

「何してるの？」

頭をかかえて不思議な行動をしている私に問いかける輝^{てる}。

「へ?! いや! なんでもない!」

私は顔を真っ赤にしながら答える。

輝てるはそんな私を見て笑いだした。

「はははっ。美海みみおもしろっ！」

「あはっ。あははははっ」

私もつられて笑いだす。

なんか輝てるといたらすごく楽しい

「ねー早く行こうよ！」

そんな私達の間まに機嫌わるそうな莉子りこが割り込む。

「そ、そうだね！」

私は2人を先に行かせた。

なんか・・・疲れる・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0560f/>

友達。

2010年10月12日02時47分発行